

## 「聴くこと」の文化

京極興一

はじめに

「聞（聴）く」という言葉には、次の例のような複合語（a・b）や関連語句（c・d）が多く見られ、五百語を越えると推定される。この現象は、「聞（聴）く」活動の広さと奥深さを思わせるものがある。

a 聞き―誤る・合せる・入る・入れる・置く・覚える・及ぶ・返す・苦しい・込む・知る・捨てる・澄ます・損なう・出す・ただす・違える・つける・伝える・とがめる・届ける・取る・直す・流す・馴れる・にくい・ほれる・漏らす・分ける

b 聞き―書き・上手・逃げ・役・耳

c 聴―講・取・聞 謹・傾・盗・拝・傍―聴 外・仄・他・伝―聞

d 耳―新しい・驚く・聡い・障り・順う 耳が―痛い・肥える・早い 耳に―入れる・立つ・留める 耳を―洗う・傾ける・澄ます

なお、「利く・効く」と表記される言葉がある。

目・体・氣・自由・無理がー利く 利きー酒・腕 葉がー効く 効きー目

語源が「聞（聴）く」と通じるといふ説もある。定説ではないが興味深い。

さて、この「聞（聴）く」の活動を大別すると、次の二類となる。

- (1) 音響、音声を耳に感じ取ること……感覚的行為
- (2) (1)から進んで、その内容を受け入れ理解すること……意志的行為

更にこの中の(2)の「内容を受け入れ理解する」行為には、普通程度の理解から、耳を澄まし心に深く受けとめる高度の理解まで、深淺の種々の段階がある。

このように、その活動は非常に広く深いものがあるが、(1)(2)の全体を包括して表す場合や、(2)の中の普通程度の理解を表す場合に「聞く」を用いるのに対し、(2)の中の高度の理解を表す場合には、特に「聴く」を用いることが多い。

以下、この「聴くこと」にかかわる文化について考えたい。

## 一 「聴くこと」の今日的課題

日本人の言語生活の歴史を顧みると、明治期以降の近代とそれ以前との間には大きな変化があった。その第一は、教育の発達や出版物の増加によって、読み書きの文字言語生活が飛躍的に向上したことであ

る。しかし一方、話し聞く音声言語の分野に衰退がなかったであろうか。外山滋比古氏は、その視点から次のように論じている。

日本の近代文化は目の文化である。言葉については思想、つまり、目、文字、読書によってとらえやすい部分がかつとも尊重され、言葉の調子とか、おもしろさは低級なものとして放置されてきた。笑いの価値は公認されることもなく、深刻で難解なものが高尚であるときまつている。(中略)

文字による記録が唯一の信頼できるものと考えられるようになった近代においては、口と耳による「不確実」な伝達はすべて正統的文化より一段も二段も低い、二次的なもののように見なされているが、言葉の文化を考えるには、耳の理解を見直すことから始めるべきであろうと思われる(『日本語の感覚』『聴聞の世界』一九七五年 中央公論社)。

次に、太平洋戦争終結(一九四五年)以降の言語生活には、特に著しい変化があった。先ず、「書くこと」「読むこと」は、表記の平易化、文書作成機器の発達、出版物の増加などによって、非常に進歩し豊かになった。また、「話すこと」についても、言論の自由、人間関係の広がりに関連して、特に公的な場面における談話への積極的な姿勢を醸成した。これに伴って、「聞くこと」の機会や場面も広がったと思われる。しかし、普通に理解する程度の「聞くこと」はともかく、心に深く受けとめること、いわば「聴くこと」の面に、果たして進歩といえるものがあつたであろうか。

例えば、「聞くこと」の教育は無きに等しいとは、大方の評価である。次の西尾実氏の提言も、残念ながら実践面に生かされることがなかった。

われわれが、いま、話しことばの生活を確立させるために、あらためて努力を払わなくてはならぬことは、この聞くことの意義に目ざめ、聞く力を育てていくことである。家庭では、話すことの躰に先だつて、聞くことの躰が行われなくてはならぬ。学校では、「話し方」という分科の名称が、「聞き方」を含めているなどというような安易さにとどまることなく、「話し方」とともに「聞き方」という分科が立てられるべきである。そして、文字の教育に書き取り練習があるように、いや、それ以上に、ことばの教育には聞きとり練習が、あらゆる機会をとらえ、あらゆる方法をもって、行われなくてはならぬであろう。

社会生活においても、一般に、人の話を聞く心の広さの足りないこと、聞く態度のできていないことが反省せられ、それが、社会人として、いかに大きな欠陥であるかを、自ら恥じ、自ら恐れるような通念が成立しなくてはならぬであろう（『ことばとその文化』三 話しことば 一九四七年 岩波書店）

更に、近年は、児童・生徒・学生をはじめ社会人の中に、精神的な問題に悩む人が増加しているが、その原因には、家庭・学校・職場等における人間関係の問題、特にコミュニケーションのつまずきを挙げることが多い。それは、周辺の人々の「聴くこと」の姿勢にかかわることを意味するとも思われる。とするならば、これらは、現代社会の「聴くこと」の衰退によって生じた現象と見られよう。因みに、カウンセラー活動の第一歩は、「よい聴き手」として接することにあるといわれる。

以上のように、近代の日本人の言語生活は、「書くこと」「読むこと」「話すこと」の面において非常な

進歩を遂げてきたが、「聴くこと」については、多くの問題を抱えている。このような現状からすると、「聴くこと」の文化の復活や教育への導入は、今日的課題として取り組みが求められているといえよう。

## 二 仏道修業における「聴くこと」

「聴くこと」の文化の中で、そのあり方や大切さについて論じている例として、仏道修業に関する道元どうげん禅師ぜんじと蓮如れんにょ上人じょうにんの言葉の一節を取り上げたい。ともに、弟子や信者に対しての懇切な教えである。

道元禅師（曹洞宗の開祖。永平寺を創建。一二〇〇年～一二五三年）

モシ己見こけんヲ存ゼバ、師ノ言葉耳ニ入ラザルナリ。師ノ言葉耳ニ入ラザレバ、師ノ法ヲ得ザルナリ。又タダ法門ノ異見ヲ忘ルルノミアラズ、又世事ヲ返シテ、飢寒等ヲ忘レテ、一向ニ身心ヲ清メテ聞ク時、親シク聞クニテアルナリ。カクノゴトク聞ク時、道理モ不審モ明ラメラルルナリ（懷奘えいじょう筆録『正法眼藏隨聞記』一・十四 日本古典文学大系 岩波書店）

もし自分の考えを持っていると、師匠の言葉が耳にはいらないのである。師匠の言葉が耳にはいらないければ、師匠の法が身につかないのである。さらに、ただ教えの上でのちがった考えを持たないばかりではない、世俗の事をいっさい持ちこまず、飢えや寒さも念頭におかず、ひたすら身心を無にして法を聞く時こそ、真に身に親しく聞けるのである。このようにして聞くと、道理も不審も、自然に明らかになるのである（水野弥穂子訳『正法眼藏隨聞記』筑摩書房）

仏道修業の基本は、説法の聴聞にあるが、それには、先入観を持たず（己見ヲ存ゼズ）、無私の姿勢で（身心ヲ清メテ）理解しようとしなければならないと説いている。

蓮如上人（浄土真宗。本願寺八世。石山本願寺を創建。一四一五年～一四九九年）

一つ事を聞いて、いつもめづらしくはじめたるやうに、信の上にはあるべきなり。ただ、めづらしきことを聞きたく思ふなり。一つことをいくたび聴聞申すとも、めづらしくはじめたるやうにあるべきなり（『蓮如上人御一代聞書』実悟記二二五 岩波文庫）

いかに不信なりとも、聴聞を心にいれて申さば、御慈悲にて候あひだ、信を得べきなり。ただ仏法は、聴聞に極まることなり（同右二九〇）

聴聞は、常に初心に立ち返り謙虚に（めづらしくはじめたるやうに）あるべきこと、また、仏道修業は聴聞以外の何物でもない（聴聞に極まる）ことを説いている。

以上は、「聴くこと」の歴史の中の一齣、仏道修業に限られたものではあるが、このような「聴くこと」重視の考え方は、布教活動を通して一般の人々の生活の中にも影響を及ぼすことがあったのではなからうか。

### 三 文学における「聴くこと」

「聴くこと」の中から形成された文学作品は、和歌・俳諧を頂点として多く見られ、日本文学の一つの

特色とも考えられるが、ここには、現代の翻訳文学を含む三作品を取り上げた。これらの作品は、「聴くこと」の奥深い世界や、「聴くこと」が人の心を動かし、自らを形成する姿を描いている。「聴くこと」の文学の逸品といえよう。

なお、紙数の制約から、本文の一部の抄出と参考資料を付記するにとどめた。また、「みみをすまます」は、一句一行取り、連と連の間一行開きが原形態である。

### 1 谷川俊太郎「みみをすまます」(一九七四年 『みみをすまます』福音館書店)

みみをすまます きのうの あまだれに みみをすまます

みみをすまます いつから つづいてきたもしれぬ ひとびとの あしおとに みみをすまます めを

つむり みみをすまます ハイヒールのこつこつ ながぐつのだたどた ぽっくりのぼくぼく みみ

をすまます ほうばのからんころん あみあげのざつくざつく ぞうりのぺたぺた みみをすまます

わらぐつのさくさく きぐつのことこと モカシンのすたすた わらじのてくてく そうして は

だしのひたひた…… にまじる へびのするする このはのかさこそ きえかかると ひのくすぶり

くらのやみのおくの みみなり

#### (五連中略)

うまのいななきと ゆみのつるおと やりがよろいを つらぬくおと みみもとにうなる たまおと

ひきずられるくさり ふりおろされるむち ののしりと のろい くびつりだい きのごぐも つ

きることはない あらそいの かんたかい ものおとにまじる たかいびきと やがて すずめの

さえざり かわらぬあさの しずけさに みみをすます

(ひとつのおとに ひとつのこえに みみをすますことが、もうひとつのおとに もうひとつのこえ

に みみをふさぐことに ならないように)

みみをすます じゅうねんまえの むすめの すすりなきに みみをすます

みみをすます ひやくねんまえの ひやくしやうの しやつくりの みみをすます

みみをすます せんねんまえの いざりの いのりに みみをすます

みみをすます いちまんねんまえの あかんぼの あくびに みみをすます

みみをすます じゅうまんねんまえの こじかのなきこえに ひやくまんねんまえの したのそよぎ

に せんまんねんまえの なたれに いちおくねんまえの ほしの ささやきに いっちやうねん

まえの うちゆうのとどろきに みみをすます

みみをすます みちばたの いしころに みみをすます かすかにうなる コンピューターに みみ

をすます くちごもる となりのひとに みみをすます どこかでギターのつまびき どこかでさ

らがわれる どこかであいうえお ざわめきのそのの いまに みみをすます

みみをすます きょうとへとながれこむ あしたの まだきこえない おがわのせせらぎに みみを

すます

この詩は、十六連、百七十九行から成り、身近な・遠くの、過去・現在・未来の、戦い・平安の等々、さまざまな八十二の「おと」と「こえ」にみみをすますのである。「みみをすます」のリフレインは三十



四回に及ぶが、この言葉そのものが、「聴くこと」の世界の奥深さを象徴するものといえよう。

谷川氏には、次の随想もある。

苦しみのあまり、また哀しみのあまり人が呻くとき、その声は表記できない。へおおへでもへああへでもない呻きを聴くとき、私たちの心身にうごめくもの、そこに言葉の本来のボディがあり、それを聴きとることは風の音、波の音、星々の音を聴きとることにつながる。どんな雑音のうちにも信号がかくれている、どんな信号にも楽音がかくれている（動いている言葉）へ『ん』まであるく』一九八五年 草思社）

なお、中間に挿入された（ ）の中の連は、「みみをすます」ことのあり方を語るが、河合隼雄氏は、これについて次のように述べている。

これはほんとうに私が心掛けていることで、われわれカウンセラーが心しなければならぬことです。（中略）耳をすますというのは、スーッとすんでいるわけですから、その前にいる人以外の音も全部落ちてくるというか、全部入ってきてもいいようになっていくということなんです。そういう状況にいるから、われわれの仕事が成立するのです（『日本語と日本人の心』第一部 一九九六年 岩波書店）

## 2 ミヤエル・エンデ『モモ』（一九七三年 大島かおり訳『エンデ全集3』岩波書店）

小さなモモにできたこと、それはほかでもありません、あいての話を聞くことでした。なあんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんて、だれにだつてできるじゃないかって。

でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこの点でモモは、それこそほかには例のないすばらしい才能をもっていたのです。

モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人もきゆうにまともな考えがうかんできます。モモがそういう考えを引き出すようなことを言ったり質問したりした、というわけではないのです。彼女はただじつとすわって、注意ぶかく聞いているだけです。その大きな黒い目は、あいてをじつと見つめています。するとあいてには、じぶんのどこにそんなものがひそんでいたかとおどろくような考えが、すうっとうかびあがってくるのです。

モモに話を聞いてもらっていると、どうしてよいかわからずに思いまよっていた人は、きゆうにじぶんの意志がはっきりしてきます。ひっこみ思案の人には、きゆうに目のまえがひらけ、勇気が出てきます。不幸な人、なやみのある人には、希望とあかるさがわいてきます。(中略)

モモは犬や猫にも、コオロギやヒガエルにも、いやそればかりか雨や、木々にざわめく風にまで、耳をかたむけました。するとどんなものでも、それぞれのことはでモモに話しかけてくるのです。

友だちがみんなうちに帰ってしまった晩、モモはよくひとりて長いあいだ、古い劇場の大きな石のすりばちの中にすわっていることがあります。頭の上は星をちりばめた空の丸天井です。こうしてモモは、荘厳なしずけさにひたすら聞いているのです。

こうしてすわっていると、まるで星の世界の声を聞こうとしている大きな大きな耳たぶの底にいる

ようです。そして、ひそやかな、けれどもとても壮大な、えもいわれず心にしみいる音楽が聞こえてくるように思えるのです。

そういう夜には、モモはかならずともうつくしい夢をみました。

さあ、これでもやっぱり、人に耳をかたむけるなんてたいしたことではないと思う人がいますか？  
そういう人は、モモのようにできるかどうか、いちどためしてみることですね（二章 めずらしい性質とめずらしくもないけんか）

その後、モモは、現代社会の人間性破滅を目指す灰色の男、時間泥棒に挑戦し、再び人間の心豊かな生活を取り戻すことになるが、そのエネルギーの源は、まさにこの「聴く力」にあった。

子安美知子氏は、エンデが語った言葉と、シュタイナーの『いかにしてより高次の世界の認識を獲得するか』の中の言葉を引用し、その共通性を指摘している（『モモ』を讀む』第一章 人の話を聞く力 一九九一年 朝日新聞社）。

モモが身につけていたような、ひとの話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくにすることにあります。それによって、自身のなかに他者を迎える空席ができます。そして相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女のなかにはいつてくるものが、良いものか悪いものかと問うことをしません（エンデ）

全自然をこのやりかた（注 自分をまったく無にして他者の言葉や音を聞くこと）で感受するすべを学ばなければならない。それによって感情と思考の世界に、ひとつの新しい知覚器官の種子がまか

れる。全自然がその響きを通して、人間に秘密をうちあけはじめる。これまで彼の魂にとつて理解できない響きにすぎなかったものが、いまや意味深い自然界の言葉となる。いわゆる無生物から出る響きにしても、これまではただの音としか聞こえなかったものを、いまや魂の新しい言葉として聞きとるのである（シュタイナー）

### 3 ヘルマン・ヘッセ『シツダルタ』（一九二二年 手塚富雄訳 角川書店）

シツダルタは、バラモンの高貴な家柄の子として生まれ、人々に愛され、また喜びを与える存在であったが、満たされぬ心のままに家を出て、苦行僧となったり、世俗的な物質生活や享樂生活を遍歴する。その放浪の末に、渡し守ヴァズデーヴァに巡り合った。

ヴァズデーヴァは注意深く耳を傾けていた。耳をすましていつさいを彼は理解し、受け入れた——シツダルタの素姓、その少年時代、すべての修行、すべての探求、すべての喜び、すべての悩みの物語を。これこそ渡し守の美德のうち、最もすぐれた美德の一つであった、彼は「聴くこと」を理解している点において類まれな人だった。彼が一語も発しないのに、語り手はよく感じた、ヴァズデーヴァが静かに、胸を開いて、待ち受けながら、自分のことばを受け入れてくれること、そして彼が一語も聞きもらず、一語もあせて促すことなく、賛辞も非難もはさまずに、ただじつとこちらのことばに傾聴していることを。このような聞き手に、自分の思いを告白し、その胸のなかへ自分の生涯、自分の探求、自分の苦悩を葬ることはなんとという幸運だろう、そうシツダルタは考えた。（中略。こうして、シツダルタは、この傾聴の達人ヴァズデーヴァのもとにとどまり、その導きによって、）彼

は川から聴くことを学んだ、心静かに、魂をひらき期待に満ちて、あせることなく、望むことなく、判断も意見ももつことなしに、耳を傾けることを（第二部 渡し守）

シッダルタは聴きに聴いた、いまは彼はまったく耳となった、まったく傾聴のなかに身を没し、まったくおのれ自身を離れてむなしく、まったくすべてを吸い入れるばかりだった。彼は、いま自分が聞くことを奥底まで学び究めたと感じた。（中略）この瞬間にシッダルタは、運命と戦うことをやめ、苦しむことをやめた。彼の顔には、いつさいの我欲の絆を脱し、完成を知り、生起の川、生命の流れと一つになり、他とともに悩み、他とともに喜び、流れに身をゆだね、「統一」に帰入した英和の明るさに咲きおつた（第二部 「オーム」）

すなわち、シッダルタは悟りの境地に入ったのである。モモは、天性身に付いていた聴く力によって人々の心を癒したのに対して、シッダルタは、ひたすら学びに学んで「聴くこと」を究め解脱の世界に達した。二人の在り方に違いはあるが、どちらも「聴くこと」の究極の姿が見事に描かれている。そのすばらしさに触れることは、法悦にもたとえられようか。中村草田男の句を挙げて結びとする（『中村草田男全集』第四巻）。

浅間山麓をややしばし登れる個所に、真楽寺なる古寺あり

聴き倦まず古泉湧く甘露音

付記 本稿の関連論文に、拙稿「『聴くこと』の文化と教育」（『学海』第十四号 一九九八年三月 上

語る

田女子短期大学国語国文学会がある。